2010年7月8日発行

江戸遺跡研究会会報　No.123

江戸遺跡研究会
http://www.ao.jpn.org/edo/

江戸遺跡研究会 第126回例会のご案内

日　時：2010年7月21日（水）19:00～

内　容：**石﨑俊哉氏　（東京都埋蔵文化財センター）**
「港区愛宕下遺跡の発掘調査」**（仮題）**

会　場：**江戸東京博物館　会議室**（大会を行っている場所です）

交　通：ＪＲ総武線両国駅西口改札　徒歩３分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）Ａ４出口　徒歩１分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室　（堀内･成瀬）　03-5452-5103

江戸遺跡研究会公式サイト
http://www.ao.jpn.org/edo/

◇江戸遺跡研究会第125例会は、2010年5月19日（木）午後7時より江戸東京博物館学習室2にて行わ◇
◇れ、越田真太郎氏より以下の内容が報告されました。◇

真壁陣屋跡の調査

越田　真太郎
（桜川市教育委員会）

１　はじめに

真壁陣屋跡は茨城県桜川市真壁町真壁に所在する（図１）。今回の報告は平成 21 年度に行った、（仮称）桜川市多目的複合施設建設工事に先立つ発掘調査（真壁陣屋跡第１地点）の概要である。

発掘調査は桜川市教育委員会が行い、第 1 地点の調査面積は約 4600 ㎡である。また、近世以降の遺物観察等については水本和美氏（千代田区四番町歴史民俗資料館）の協力を得ている。

２　歴史的環境

真壁陣屋は、真壁藩の政庁として設置され、のちに笠間藩に引き継がれた。陣屋の所在する近世の真壁町は中世真壁氏の城下町に端を発する。そこで、すこし寄り道になるが歴史的な変遷を追っておきたい。

真壁地域は古代真壁郡の中心地で、平安末期に常陸平氏一族の平長幹が入部し真壁氏を名乗って以降は、おおむね中世を通して真壁氏が統治している。中世前半期の真壁氏の居城は諸説ありいまだ不確定だが、15 世紀中葉以降は真壁城を居城とした。真壁城は筑波山系から西へ延びる尾根上に築かれ、城下町はそのさらに先（西）の微高地に形成されている（図２）。これまでの発掘調査により真壁城は、16 世紀後半に方形居館群から戦国城郭化したことが判明しているが、それと同時期に城下町の形成も始まったと考えられており、「常陸国日月牌過去帳」（高野山清浄心院蔵）などの諸史料や発掘成果などから城下町の復元や形成過程についての論考がなされている（市村高男 1996、寺崎大貴 2006、宇留野主税 2008）。

戦国期に始まった真壁町は慶長七年（1602）に真壁氏が佐竹氏の秋田移封に伴って角館へ移ったことにより城下町としての機能は終え、以降は陣屋町・在郷町として発展していくことになる。

慶長七年以降に真壁地域を統治した領主は表１の通りである。真壁氏の去ったのち５年間は幕府領であったが、慶長十一年（1606）に浅野長政が常陸国真壁郡・筑波郡で五万石の領地を隠居料として与えられたことにより真壁藩が成立する。長政は江戸に居住していたが、真壁に陣屋を置き統治を行った、との伝承がある。ただし、この陣屋は今回発掘を行った場所ではなく、古城村（旧真壁城）の陣屋（現在も地名が残る）を指すが、発掘調査等はなされていないため真偽は不明である。

３　史料からみた真壁陣屋

今回報告する真壁陣屋跡がいつ設営されたかは不明だが、慶長二十年（1615）に作成された「真壁町屋敷帳」には前々鷹師町（現高上町）に１町を超す年貢引地が記されている。これを接収された藩用地で陣屋に使用されたと考えると、この頃には成立していたと見ることができよう。長政は慶長十六年（1611）に死去し（註１）、

真壁藩は三男の長重が継承しており、その際に隠居料のため軍役の負担のなかった長政の代とは違い五万石相応の家臣団を形成する必要が生じたと思われ、陣屋を中心とした家臣団の居住地等を形成したと考えられる。長重は元和八年（1622）に笠間へ転封し真壁藩は廃藩、以後真壁町を含む地域は笠間藩の飛地となる（註２）。

長重の次代長直は正保二年（1645）に播磨国赤穂へ国替えとなる。その後、井上氏、本庄氏、井上氏と領主が変わるなかで延享三年（1746）の記録には「御陣屋の事、屋敷数拾四軒、先年浅野弾正様之御館、足軽共二あり候処、本庄安芸守様之御領地の時分より御館潰れ、長屋ばかり有り候」とある。

翌延享四年（1747）の藩主交替引き継ぎ記録には「真壁高上町御屋敷」とあり、長屋・土蔵２棟があり、前領主の本庄氏から引き継いだ通りとしている。この年に製作された「真壁町絵図」（笠間稲荷神社蔵牧野家文書）には「御屋敷長屋　厩六ツ　同心部屋八ツ、内二ツ小頭部屋」などと記載があり、陣屋西側には間口五十間の茅葺長屋門が描かれている（註３）が、寛延二年（1749）の町内 1200 棟が焼失したという大火により長屋門を含む陣屋も焼失した。その後陣屋は立て直され使用されたようであるが、長屋門は復興されていない。製作時期不明の「御陣屋絵図」（中村脩一家蔵）には長屋門が描かれておらず、この頃の時期の絵図と推測される（図４、桜川市教育委員会 2006 より転載）。

一時幕府領となっていた安永六年（1777）から天明五年（1785）までの間、陣屋は全く使用されず、庭は畑となっていた。天明六年（1786）に笠間藩領に戻ってから陣屋を再建し、代官など 13 人の役人を配置した。

天保八年（1837）には再び大火があり、陣屋を含む 300 棟ほどが焼失したという。その後、茅葺であった陣屋は瓦葺、入母屋で再建された。

廃藩置県により笠間藩は笠間県となり、明治四年（1871）に笠間県は茨城県へ統合、真壁陣屋は廃止となった。跡地には茨城県真壁支庁が置かれ、明治六年（1873）には陣屋の建物を転用して真壁小学校が開設された。以後、この地には学校や官公庁、公民館、公園等の諸施設が繰り返し建てられるようになっていく。

４　発掘調査の成果

平成 21 年度に行った発掘調査は真壁陣屋の東側部分で、絵図から判断すると裏庭にあたると想定され、池と水路、陣屋を囲む堀などが描かれている。実際に調査を進めると絵図の通りと言っても良い形で池・水路が検出され、堀の一部も検出された。ただし、前述の通り本調査区域は近代以降多数の施設が建設されており、それらの建物の基礎などにより多くの破壊を受けていた。

堀跡（SD50）は陣屋を囲む堀である。調査では東側の一部が検出されたが、破壊も多く受けていた。最も残りの良い部分での幅は約５m、深さは約２mで、断面形状は逆台形状である。数回の堀浚いが行われたと思われる堆積状況を示しており、長期間機能していたと思われる。出土遺物は 18 世紀後半から 19 世紀のものを主体とし、最上層付近から近代の遺物が出土する。

池跡（SG52）は L 字状に折れ曲がった形をしている。屈曲部付近を境に様相が異なるため、北池・南池に分けて把握している。

北池は幅７～８m、深さ約 1.5 m、長さは 30 mほどで、東側は水路（SD57）と接続している。壁面の傾斜はゆるやかで、底面は関東ローム層中に形成されており、一部には白い玉石が貼られている。調査中に湧水はなかった。池跡の覆土を観察すると、西側の中層付近に大量の炭化物と焼土を含む土層がある。層中には遺物

も大量に含まれ、炭化した椀や御櫃の形をした炭化米なども出土しており、火事場整理に伴って池を埋め立てた可能性がある。出土している遺物は18 世紀後半以降のものである。

南池も幅７～８m、長さ 30 mほどだが、深さは約２mあり、北池よりやや深い。壁面の傾斜はかなり急で、底面は関東ローム層下の粘土層まで達しており、平坦になっているが石は貼られていない。調査中は周囲から水が湧き（流れ込み)、放置しておくと 50cm 程度は溜まっていた。覆土の状況は北池とかなり違い、低層には木製品・樹木片を多く含む泥層が堆積しており、泥層より上の土層は短期間で埋め戻された様相を示している。遺物は泥層内からは近世を中心に近代のものを一部含む遺物が出土しており、上部の層からは近代の遺物が多く出土している。

水路（SD57）は SG52 と SD50 を接続しているものである。SG52 東部から北東へ４mほど伸び、一度調査区域外へ出るが、調査区北東部で再び確認でき、約 15 mで SD50 と接続する。幅は約１m、深さは 80cm ほどである。断面形状は SG52 と接続している付近では逆台形状だが、東側では壁面がほぼ直立している（註４)。西から東へ傾斜しており、池からの水を堀へ排水する機能を有していたと思われる。出土遺物は少ないが 18 世紀後葉以降のものである。

以上が、近世の主な遺構であるが他にも径約 14 mの円墳（註５）や 16 世紀後半代のかわらけが出土した掘立柱建物跡と区画溝などが検出されている。

５　出土遺物について

出土した遺物は天箱で 200 箱近くに上る。陶磁器・土器類が約 100 箱で半分を占め、瓦も 40 箱ほど出土している。ほかは弥生時代～中世の土器や埴輪、木製品、金属製品などである。遺構別にみると SG52 が陶磁器・土器類 60 箱強、瓦約 40 箱、SD50 が約 10 箱でほぼこの２遺構で出土遺物の大半を占めている。

磁器は肥前と瀬戸・美濃製品が主体で、江戸遺跡と同様である。碗・皿・鉢・蕎麦猪口など豊富な食膳具類がある。径 40cm を超える大皿なども出土しており、江戸遺跡では 18 世紀後半以降の町屋などにもみられる構成と思われる。近代に至る資料も出土しており、大皿や段重など江戸時代以来の器種に型紙絵付けをしたものもみられる。

陶器は灯明皿と灯明受皿に、瀬戸・美濃、志戸呂や信楽とは異なる別の産地の製品がある。受皿の形態は瀬戸・美濃と同じ切立て形。胎土は、緻密で粘りがありそうなもの。産地は水戸の七面製陶所などを候補に考えていたが、益子、小砂、相馬などの可能性もある、という指摘を受けた（註６)。ほかにも擂鉢などの大型製品にも益子・笠間など、遺跡周辺の窯業地の製品と思われる資料が含まれる。また、七面製陶所製の可能性のある製品もある（註７)。

土器は常陸の在地土器が多くみられる。中世以来常陸は土器生産が盛んで、真壁地域はその生産地のひとつと考えられている。近世の土器職人に関する文献も残されており、現在でも土管・植木鉢生産などが行われている。真壁地域（筑波山北西麓）の土器の胎土は金雲母（黒雲母）が多く含まれることを特徴としており、出土遺物内にもみられる。一方、白雲母（銀雲母）の含まれるものも多数あり、これは筑波山南麓から東麓にみられる胎土である。生産地としては常陸府中（現石岡市）付近などを想定している。また、手あぶりなど小型の火鉢類には江戸近郊産の瓦質土器がみられる。ただし、火災に遭っているためか、赤色に変色している。

瓦は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、桟瓦、軒桟瓦、役瓦などがある。瓦当文様は江戸式のものだが、瓦そのものは在地産と思われる。「真重」「真福」「傳」などの刻印があるものがみられる（註８）。

木製品は樽・桶、樽の栓、柄杓、籠、椀、下駄、木札、そろばん玉、独楽などが出土している。樽・桶が数点出土しており、大きいものは径 40cm、高さ 60cm ほど、小さいものは径 12cm、高さ 16cm くらい。木札には表裏に墨書で「老　□津（茂）三郎改　□□　□□兵衛／辰　御米四斗入　桜井村　米主　又□兵衛」と書かれており、陣屋に納入された米俵に付けられていたものと考えられる（註９）。これら木製品のほとんどは SG52 からの出土品で、北池から出土したものは炭化しており、米や粟（もしくは稗）もある。南池からのものは泥層内から出土した。

金属製品は銭貨、煙管、短刀、矢立、火箸、飾り金具、釘、鉄砲玉などである。

６　おわりに

以上が真壁陣屋跡第１地点の発掘調査概要である。調査を行ったのは陣屋の一部分ではあるが、絵図面と対比できる遺構の検出など、その様相の一端を知ることができる発掘事例となったと思われる。なお、遺物の詳細な検討は中途であり、今回報告した内容と今後若干の変更がある可能性があることはお断りしておきたい。

註

註１　真壁城東方の照明寺に葬られた。照明寺は長政の法名「伝正院殿功山道忠大居士」にちなんで伝正寺と改称された。

註２　長重は笠間藩主となったのちも真壁陣屋に居住し、この地で没した。死後は伝正寺に葬られた。

註３　図３は同系統の絵図とみられる江戸後期作の「真壁町屋敷絵図」（塚本清家蔵）である（桜川市教育委員会 2006 より加筆して転載）。

註４　壁面や底面に板などが貼られていた（樋のようになっていた）可能性も考えられるが、痕跡は検出できなかった。

註５　この円墳に隣接して SD50 が掘削されている。その付近の SD50 は円墳の盛土と同一のものと思われる土で埋まっており、この円墳の墳丘は近世まである程度の高さは存在していた可能性が高い。絵図面にはないが築山として使用されていたのではないだろうか。

註６　茨城県陶芸美術館の栗田健史氏の御教示による。

註７　真壁陣屋は領内に窯業生産地である笠間を持つ笠間藩の陣屋であり、その関連からも笠間製品の出土が多いと考えられる。また、益子も約 20km 北に存在している。

註８　真は真壁の真か。真壁でも昭和の終わりごろまでは瓦生産を行っており、近在にも生産地は多く存在していたという（上遠野公一・加藤誠洋 2006）。

註９　木札の文面はまだ検討中で、今後修正する可能性がある。

引用・参考文献

市村　高男　1996　「戦国期城下町論」『真壁氏と真壁城―中世武家の拠点―』

宇留野主税　2008　「戦国期真壁城と城下町の景観」『茨城県史研究』第 92 号

上遠野公一・加藤誠洋　2006

「建築技法と職人」『伝統的建造物群保存対策調査報告書　真壁の町並み』

桜川市教育委員会　2006　『伝統的建造物群保存対策調査報告書　真壁の町並み』

寺崎大貴　2006　「中世真壁城下町の復元」『伝統的建造物群保存対策調査報告書　真壁の町並み』

表1

	年代	藩主
幕府領	慶長7(1602)～慶長11(1606)年	－
真壁藩	慶長11(1606)～元和8(1622)年	浅野氏
笠間藩	元和8(1622)～正保2(1645)年	浅野氏
	正保2(1645)～元禄5(1692)年	井上氏
	元禄5(1692)～元禄15(1702)年	本庄氏
	元禄15(1702)～延享4(1747)年	井上氏
	延享4(1747)～安永6(1777)年	牧野氏
幕府領	安永6(1777)～天明5(1785)年	－
笠間藩	天明5(1785)～明治4(1871)年	牧野氏

図１　桜川市の位置（●印が真壁陣屋跡）

図２　真壁城と真壁城下町（上が北）

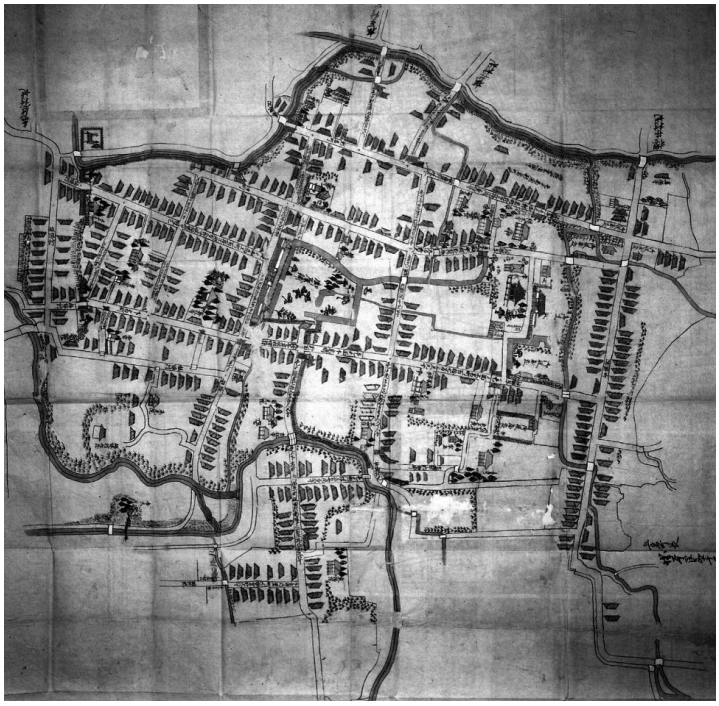

図３－１　「真壁町屋敷絵図」（塚本清家蔵、上が北）

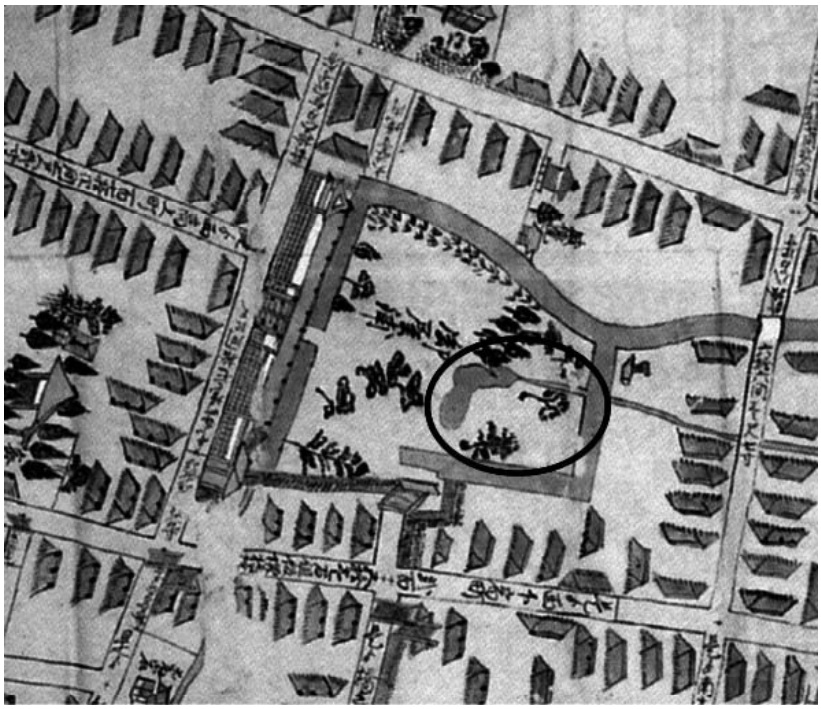

図３－２　「真壁町屋敷絵図（部分拡大）」（丸印内が調査区）

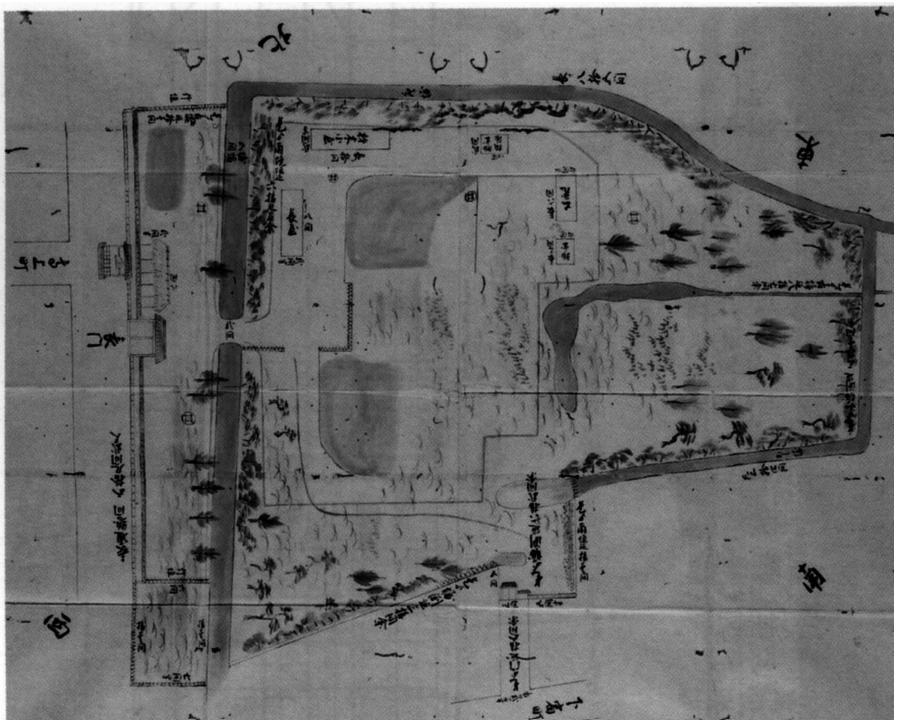

図４　「御陣屋絵図」（中村脩一家蔵、上が北）

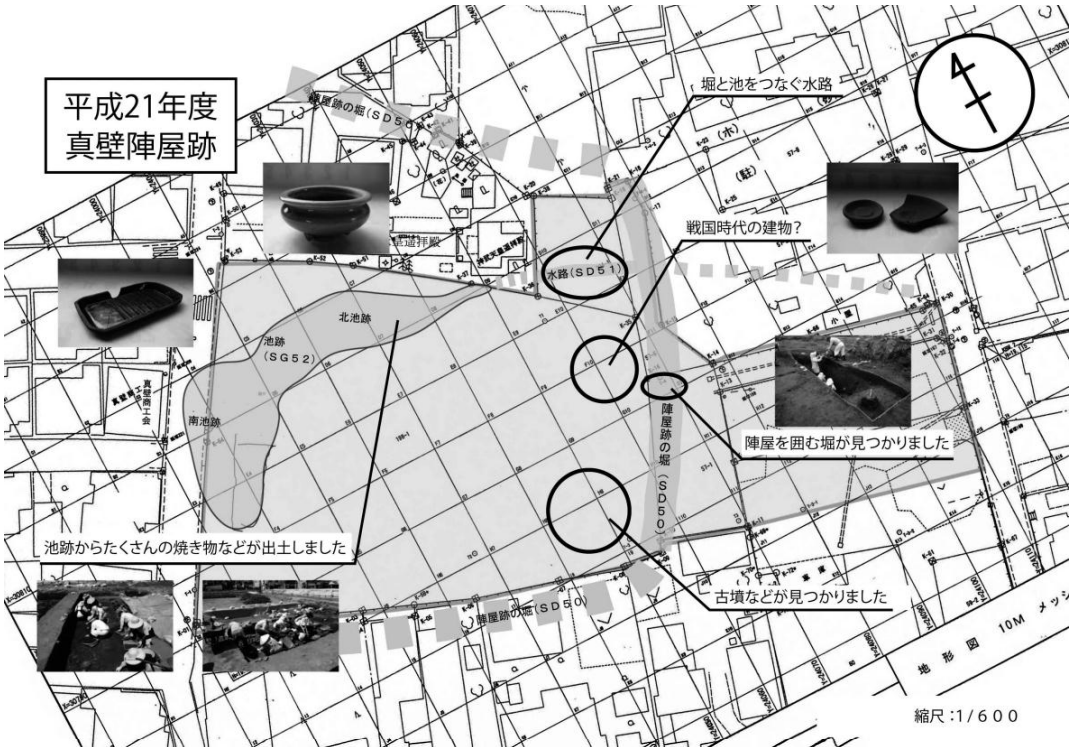

図５　真壁陣屋跡第１地点遺構概念図（現地説明会資料より）

第24回江戸遺跡研究会大会

『江戸城･城下と伊豆石（仮題）』のお知らせ

例年、年明け1月末頃に行っている江戸遺跡研究会大会ですが、第24回大会は、石丁場遺跡研究会との共催で、**2010年9月19･20日（日･月）**に**東京芸術劇場大会議室**で行う予定です。皆様ふるってご参加ください。

大会趣旨

近年、全国的な近世城郭の調査に続いて、そこに石材を供給した石切丁場の調査が行われるようになりました。江戸遺跡研究にとっても江戸城はじめ、近世都市江戸においても石材供給は、大きな問題であります。

今大会では、石切丁場の調査報告書が相継いで刊行された熱海市、伊東市を含めた、相・豆州の石切丁場を研究する石切丁場遺跡研究会とともに、生産地（供給）と消費地（需要）を視点に現在の調査・研究の状況と遺跡の周知や保護を含めた今後の課題などについて、意見交換を経て、今後の石切丁場遺跡における研究の土台を作りたいと思っています。

○日　時

2010年9月19日（日）：13:00～、20日（月）10:00～

○場　所

東京芸術劇場大会議室　（アクセスマップ参照）

池袋駅下車（ＪＲ各線、東京メトロ丸ノ内線･副都心線･有楽町線、東武東上線、西武池袋線）

○発表者（予定、順不同、演題は仮題です）

・梶原 勝　（文化財コム）

「基調報告　江戸城･城下と伊豆石」

・三瓶裕司　（かながわ考古学財団）

「神奈川県南西部の状況」

・杉山宏生　（伊東市教育委員会）

「伊東市の石丁場遺跡」

・栗木 崇　（熱海市教育委員会）

「熱海市内伊豆石丁場遺跡と慶長期の紀年銘文字刻印について」

・増山順一郎　（下田市教育委員会）

「豆州下田の石丁場について」

・鈴木裕篤　（沼津市教育委員会）

「沼津市内の石丁場」

・石岡智武　（パリノ・サーヴェイ）

「江戸城・城下に使われる伊豆石の記載岩石学的性質」

・栩木 真　（新宿区文化観光国際課）

「江戸城への石材供給の実態」

・後藤宏樹（千代田区教育委員会）

「江戸城跡と石丁場遺跡」

・金子浩之　（伊東市教育委員会）

「江戸への石材輸送の実態」

・白峰 旬　（別府大学）

「江戸城普請と石材調達」

東京芸術劇場アクセスマップ